

2012年を迎えて

共に使命を果たし 新たな希望の道へ

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

2012年を迎えて読者の皆さまも新たな気持ちで日々の仕事や生活に臨まれていると思います。昨年は東日本大震災というかつて経験したことのない未曾有の非常時のなかで混沌とした不安な毎日を余儀なくされました。まさに「防災の父」といわれる物理学者の寺田寅彦が「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を遺しているように、東日本大震災は日本が世界有数の地震＝災害列島であることを多大な犠牲を払ってあらためて想起させました。今年はこの痛苦な教訓を踏まえつつ少しでも状況が好転するように、それぞれの場でそれぞれに課せられた務めを果たしたいものです。

ライフラインを支える業界

東日本大震災では上下水道・エネルギー施設をはじめとするライフラインの大切さが全国的に再認識されました。ライフラインは文字どおり国民の命に直結する生命線です。

震災による断水・停電によって人々はこれまであたりまえのように享受してきた水やエネルギーが存在しなければ国民生活＝経済社会が全面的に成り立たないことを思い知らされました。そうしたなかで早期復旧にむけたわが業界関係者の刻苦奮闘は特筆に値するものだったと思います。

余震に脅かされながらも復旧工事に取り組んだ管工事業者、汚水処理や仮設トイレの設置に奔走した清掃関係者、やむにやまれぬ思いで危険を顧みず駆けつけた支援隊の方々、資材の調達や救援

物資の搬入に汗を流した商社・メーカー関係者、そして全国からの多額の義援金の拠出など危機の真只中であってわが業界の底力が発揮されました。これらはいずれも尊い献身的行為であり、心から敬意を表したいと思います。

今回の震災によってふたたび明らかになったように、わが業界には国民のライフラインを守り、支え、育むという歴史的な使命が課せられています。これはどれほど強調しても強調しすぎることはありません。

平穏な社会が成立するのはその根底に日夜にわたるわが業界の活動があるからです。業界関係者の仕事はそれ自体で国民生活を左右する公共性を帯びているということ、それをいかなる状況にあっても忘れず、国民のライフラインを守り、支え、育むという大いなる誇りをもって仕事に打ち込んでいただきたいと思います。

総体としてのレベルアップへ

国民のライフラインを守り、支え、育むのが業界の歴史的な使命なら、業界紙＝業界誌の歴史的な使命は微力ながらその業界をメディアの立場からフォローするという点にあります。業界の発展なくして業界紙＝業界誌の発展もありません。常に謙虚な姿勢を忘れず、われわれもまた切磋琢磨したいと思います。

一部の企業にとどまらず業界関係企業が総体として社会的＝経済的にレベルアップするための

一助となればこれ以上の喜びはありません。そのためには業界内部の意思疎通をよりスムーズにする情報伝達に努めたいと思います。同時に業界内の課題や問題点を明らかにし、その克服の道すじを共に探っていくことも業界紙＝業界誌の大切な使命とあっていいでしょう。メリットもデメリットもすべて共有し、一歩ずつでもよりよい未来へ共に進んでいけたら幸いです。

かつてアメリカの経済学者ミルトン・フリードマンらの新古典派経済学＝マネタリズムに基づく市場開放論によって規制緩和が強行に推し進められた時期がありました。管工事業界における指定工事店制度も全面的なターゲットとなり、全管連は並々ならぬ決意で業界の存亡を賭けた攻防を繰り返していました。その際、弊社もささやかながら論陣を張って行政・業界関係者の連携に努めました。業界の基盤そのものが掘り崩されるような緊急時にはいつでもまた力の限りを尽くして命運を共にしたいと思います。

歩きつづければ希望が生まれる

日本の社会・国家・経済の流れは東日本大震災によって急激な変化を遂げつつあります。いわばわれわれの時代は震災以前と震災以後に分けられるかもしれません。

とりわけ福島原発事故による放射性物質汚染は原発の危険性を白日のもとにさらし、太陽光、水力、風力、バイオマスなどの再生可能エネルギーが注目されています。また節電に伴う省エネ・創エネ・新エネなどが現在の欠かせないキーワードとなっています。これに地球温暖化問題を含めると持続可能な社会とかグリーン経済とか環境の世紀などといったことが新たな時代のトレンドになっているとあっていいでしょう。かつてイギリスの思想家J.Sミルが唱えた「定常状態」の到来です。

いうまでもなくわが業界の先進的企業もこうした動向に意欲的にアプローチしようとしています。その意味ではわが業界も従来の枠組みだけでは簡単にとらえきれない過渡期を迎えています。

業界とは南海の孤島のようにそれだけで自律しているわけではありません。政治情勢や社会的



風潮や海外諸国の動きや他の業界などとの複合的な関係のなかで存在しています。

そこで必要となってくるのは自己を対象化する視点、すなわち業界外部からの視点です。われわれの業界がどこにあり、どこから来て、どこへ行こうとしているのか——さまざまな角度から業界の過去・現在・未来をリアルに検証することがいままに求められています。弊社もまた環境・エネルギー問題を含めて複眼的な視点から有益な報道に努めていきたいと思っています。

わが業界はライフラインの維持・管理・更新という日々の生活に欠かせない大切な責務を担っているにもかかわらず依然として困難な経営環境に直面しています。こうした時代にあえて「希望」という言葉を口にするのはたんなる強がりにも聞こえるかもしれません。

しかし中国の文豪・魯迅は『故郷』という作品のなかで「希望」を次のように解釈しています。

「思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」

魯迅にいわせると「希望」とは道のようにみずから歩いてつくりあげるものということになるでしょう。

どれほど険しくても挫けず、怯まず、あきらめず、ひたすら歩きつづけること。やがてそこから曙光のような希望が生まれてくると信じます。